

## 「目覚めて主を待ち望む」

マルコによる福音書 13章 32-37節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は「目を覚ましていなさい」という小見出しのあるマルコ 13章の最後のところで、テーマの一つは「時と永遠」です。時間は文字通り時と時の間で数値化も出来ますが、永遠の世界は数値化することは出来ず、始めも終わりも分かりません。私たちの永遠の概念は、永遠の世界におられる神が、有限な人間の歴史に垂直に介入して来られたというもので、人間も宇宙も永遠ではないことを私たちは知っています。その人類の歴史の終わりの日に、再臨の主として来られる主イエス、その主が十字架の死に向かって歩いて行かれるその時、何を語られたのか、私たちにはそれを知る必要があります。

先日来、小黙示録と言われるマルコ 13章を読んで来ましたが、主イエスが終末時の様々な事象を語られるのは珍しく、それ故多くの人はこの箇所を難解だと感じています。今日はその13章の結論で、聖書は、神殿の崩壊を予告された主に弟子たちが「それはいつ、どんな前兆があるのか」と問うたのに対する主の答え、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。」(マルコ 13: 32-33) から始まっています。この中の「子も知らない」を捉えて主イエスの神性を否定する人もいますが、これは、知り得るものをあえて知ろうとなさらず人間イエスとして人間の側にご自身を置かれたということで、何事も父の御手に委ねられたということに外なりません。

この章の中で、主は終わりの時を知らない私たちに「気をつけていなさい」「目を覚ましていなさい」と繰り返し言われています。「目を覚ましていなさい」とは終末的に生きなさいということで、「いつ主が来臨されて終末が来ても慌てることのないよう、今の時を力強く生きなさい」というメッセージです。

それでは「気をつけていなさい」とは、何を指して言われているのでしょうか。13: 6、22 では偽メシアや偽預言者といった他者の出現について言われていますが、13: 9 では「あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。」と命じておられます。まず私たちはナザレのイエス、すなわち十字架上で死に、復活された主イエスのみが、唯一の主・救い主であることを知っていなければなりません。今の世にも多くの預言があり、気候変動・温暖化への対策、SDGsなど各々は、今を生きる私たちにとって大切なものですが、私たちの存在の本質、つまり私たちの魂を救うものではありません。人間も地球も宇宙もやがては滅びます。それゆえに私たちは、自身の信仰にもっと注意しなければならないのです。パウロが「むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」(I コリント 9: 27) と言っている通りです。

続けて主はたとえ話をされますが、その中で、いつか分からないが主の来臨があることを私たちに知らしめ、目を覚まして割り当てられた仕事を忠実に果たしながらその来臨を待つようにと教えておられます。

今朝も使徒信条によって<主よ、来たりませ>を待ち望むと告白しましたが、私たちなど、いわゆる正統派グループとされる教会には、終末や再臨を軽視した時代がありました。しかし、旧約聖書は「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に 預言者エリヤをあなたたちに遣わす」(マラキ 3: 23) という、主の日の預言を最後として終わっていますし、さらに新約聖書は「・・・『然り、私はすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。」(黙示録 22: 20) で結ばれています。また、自分たちが生きている間に主が来られるという終末観を持っていた初代教会の合言葉は「主よ、来たりませ」でした。これらの事から、「主を待望する終末的姿勢こそが、キリスト教信仰の基本である」と言うことが分かります。来るべき主を待っている者、それが私たちキリスト者なのです。

これから私たちは様々な苦難に遭うでしょう。それこそ天地が滅びるかも知れません。しかし、主の言葉は決して滅びることはありません。何が起きても恐れなくて、むしろ主の日が近づいていることを知るべきです。今も生きて私たちのために働いておられる主なる神を思い、忍耐し、目を覚まし、希望を持って主の来臨をお待ちしましょう。

(説教要約 羽入田悦子)